

水野広徳における軍備観の変容

「戦争」回避と「敗戦」回避の狭間で

福島良一

はじめに

水野広徳（一八七五—一九四五）は、第二次世界大戦前の日本にあって、日露戦争を体験した経歴をもつ海軍軍人出身の「平和主義者」として、軍縮・平和論を精力的に展開した人物である。軍国日本に行く末を案じつつ、鋭い洞察力をもって、「日米非戦」を訴えつづけた慧眼の士としても評価されている。しかしながら、水野の「平和主義者」としての活動は、第一次世界大戦後の一九一九（大正八）年から翌年にかけて行われた欧州視察（彼にとつては二回目）を契機として始まったものである。彼の「自伝」によれば、視察の際に北フランスの「戦場の惨景」とドイツの「敗戦の惨苦」を目撃したことで「現代戦争」の恐ろしさを痛感し、「思想の大転換」を起こしたとされている⁽¹⁾。その「大転換」以前の水野は、自ら「軍国主義者」と称し、軍備の充実を唱えていた人物であった。それゆえ水野の「思想の大転換」は、いきおい「軍国主義者」から「平和主義者」への立場の変化として語られることが多い。だが、「主義者」レベルでの立場上の変化はそれとしても、「大転換」の内実とは一体何

であったのか。そうした問題を探るための前提作業という観点から本稿では「軍国主義者」時代の水野を取り上げ、その時期における彼の議論の中心にあった戦争や軍備をめぐる認識について検討したい。後述するように、日露戦争体験者としての水野は、「戦争の悲惨さ」への実感を通して、「戦争」の回避を希求しながら、その一方で「敗戦の悲惨さ」を認識することによって、戦争を想定した上での「敗戦」回避の重要性をも感じ取っていた。この二つの回避論を併存させた水野は、時代状況に対応しつつ軍備をめぐる議論をどのように展開し、「思想の大転換」へと達着していくのであろうか。この経緯を二つの回避論を軸に素描するのが本稿の目的である。

これまで「軍国主義者」時代を扱った水野研究としては、宮本盛太郎「水野広徳における思想の転回」（宮本盛太郎・関静雄・小西豊治・坂口満宏『近代日本政治思想史発掘 平和・キリスト教・国家』風行社、一九九三年⁽²⁾）および関静雄「水野広徳と第一次世界大戦（一）」（二）」（『帝塚山大学教養学部紀要』第三八輯・第四一輯、一九九四年八月・九五年三月⁽³⁾）などがあり、これらの研究業績が本稿に裨益する点は少なくない⁽⁴⁾。とりわけ関静雄教授の研究は、水野

の「軍国主義」思想を多面的かつ詳細に分析したものになっている。ただ、これらの研究は水野の思想転換をめぐる問題に意識が向けられていたこともあつてか、扱つ時期が主として第一次大戦勃発以降に限定されているように思われる。本稿は前述の目的とともに、水野が言論を展開し始める日露戦後から第一次大戦期に焦点をあてることで、時期的な空白を埋めることをも意図するものである。

一 日露戦争からの学習

海軍大尉水野広徳は、第四一号水雷艇長として日露戦争（一九〇四〇五）に従軍し、第三回旅順口閉塞作戦時の隊員収容作業（一九〇四 明治三七 年五月三日）や日本海海戦（一九〇五 明治三八年五月二七 二八日）などに参加した戦歴をもつ。特に日本海海戦にあつては戦功著しく、一九〇五（明治三八）年六月二〇日に東郷平八郎連合艦隊司令長官より感状を授与されるほどの武勲をたてている。⁵⁾

一方で、旅順口閉塞作戦後に、艦隊司令部から閉塞隊の記録編纂のための材料となる実戦記の執筆を求められたことがきっかけとなつて、水野は文章家としての名を高めてもいった。もっとも、この記事自体は原稿提出が遅れたためか、実際には閉塞隊記録に掲載されることはなく、代わりに新聞・雑誌に転載されることになつた。ところが、実戦に参加した軍人による書き物ということで、この記事は意外にも世間の注目を浴びる結果となつた。やがて彼は海軍部内でその文才を買われるようになり、日露戦争終結の翌年には海軍軍令部への出仕を命ぜられ、『明治三十七八年海戦史』の編纂に携わることになるのである。⁶⁾

日露戦後、水野はこうして『明治三十七八年海戦史』の編纂に従事するかたわら、その余暇をもつて、一九一〇（明治四三）年から一つの日露戦記を書き始めることになる。この書物は『此一戦』と名づけられ、翌年三月に刊行されることとなつた。⁷⁾ その執筆動機について水野は、「皇国の興廃を一戦に期したる日本海海戦に至りては、世上唯其の大捷あるを知つて、未だ其の真相を知るの人少し。

……此の大海戦の真相、時と共に埋滅に帰するは、終生の恨事なり。……専ら日本海大海戦の実状をば、広く江湖に紹介せん」とするに
あると述べている。このように海戦の実相を伝えるべく、文章家である水野によつて書かれた『此一戦』は、戦闘当事者ならではの臨場感あふれる筆致で、表現力豊かに日露両艦隊と海戦の様を描いたものになつている。しかしながら、同書の特徴・意義は戦闘描写の巧みさのみに尽きるといふことではい。むしろそれは、ストーリー展開の行間に水野自身の戦争や軍備に対する思いが滲み出されている点にあるといつてよい。その意味で『此一戦』は、日露戦争体験者としての水野の戦争観や軍備観が表出された資料であるといえよう。そこでまず、『此一戦』執筆当時の水野が自らの戦争体験を踏まえて、戦争や軍備をどのように認識していたのかを同書に掘りながら瞥見しておきたい。

一九〇〇（明治三三）年に発生した義和団事件以後、満州からのロシア軍の撤兵不履行によつて、ロシアによる事実上の満州占領が現出したことは、その隣接地である朝鮮半島（日本の「利益線」）の安全をも脅かす危険性を生ぜしめることとなつた。こうした事態が日本とそれを取り巻く極東地域全体の安全を危うくするものとして、日本側に非常なる危機意識を惹起させたことは周知のとおりである。

事態打開を目指した日露交渉は妥結を見ることなく、一九〇四（明治三七）年二月八日日露間の戦端はついに開かれることになった。⁽⁹⁾

こうして始まった日露戦争は、日本の存亡を賭けた戦いだった。水野はこの戦争を「東洋永遠の平和を維持する為め、茲に己むを得ずして兵を起し」⁽¹⁰⁾たものとして受け取った。帝国軍人水野にとっても、強大なロシアとの戦いは、日本と極東の安全を守るべく、死に物狂いで戦い抜かねばならぬ戦争であったのである。

日露戦争のとき熾烈な戦闘は、軍人の少なからぬ犠牲を伴わざるを得ないものであった。軍人の気構えを水野はこう諭す。「軍人に臨む、嘗を出づる時、国家は既に之に対して死を要求して居る。」⁽¹¹⁾それゆえ、「男兒一たび戦場に臨めば、水漬く屍、草結す屍は、素より覚悟の上」⁽¹²⁾でなければならぬ。だが、こうした勇ましい軍人精神鼓舞の言葉とは裏腹に、水野は戦場におかれた軍人たちのやるせない心情にも共感をもって思いを馳せ、その悲哀を切々と詠い上げることも忘れなかった。「中宵露宮の夢覚めて、虫声啾々枕頭に響くとき、三更直に立つて、半月皎々槽頭に懸るとき、征士の涙は一層熱く、血は一層紅である。……刀折れ、矢尽きて、徐に死を待つ時、誰か家郷を懐ひ、妻子を思はざるものがあらうぞ。」⁽¹³⁾

国家の命運を賭けた戦いの意義を認める一方で、水野の胸中には、「死を要求する国家によって強いられた軍人たちの哀しい境遇への同情と戦争の酷さへの思いが、深く刻まれていたのである。日露戦争体験者の水野の戦争観には、「戦争の悲惨にして、人道に反する」という視点がすでに据えられていたのであった。そこから推し量るに、「心情」レベルにおける「戦争」回避の意識は、水野のなかに確実に芽生えていたのではなからうか。

しかしながら、戦争体験を通して、戦争を非人道的なものとして捉え、「戦争」回避の「心情」を抱くに至ったとしても、水野は将来における戦争発生の可能性を否定し去ることはできなかった。なぜなら、日露戦争の「勝利」によって日本が国際的地位の向上を果たしたにもかかわらず、日本の台頭に対する欧米の嫌悪と日本を敵視する国が依然存在するという次のような認識があったからである。

「一たび清国を破つて、漸く世界に存在を認められたる、我が帝国は、再び露国に勝つに及んで、蕚然として世界列強の班に伍するに至り、今や国運隆々として、旭日昇天の勢あるに至つた。世界を以て白人の為めに造られたるかの如く、己惚れて居る欧米人には、早くも嫉妬の眼と、僻み根性とを以て、我を誣ふるに好戦国民を以てし、或は黄禍説を唱道し、或は東力西漸を憂惧し、中にも或国の如きは、我が国勢の隆昌を憂ふるの余り、嫩にして摘まずんば斧を用ふるに至らんと懸念を以て、頻に我に対して、挑戦的態度を執つて居るものもある。」⁽¹⁴⁾

こうした日本に向けられる悪意に満ちた視線を感じ取った時、水野は「敵意をもってこれに対峙しようとする姿勢をとつていく。そこには「黄禍説」に象徴される欧米の傲慢さへの憤慨と日本に対する「或国（アメリカ）の「挑戦的態度」への反発が暗示されていた。このような敵対的感情に突き動かされた水野は、いわば欧米による「日本たたき」の原因を日本の勢力増大に対する「嫉妬」「僻み」に矮小化して捉えることに終始したのである。

しかし、たとえば当時アメリカにあつて日米関係悪化を憂慮していたイェール大学教授河貫一（歴史学者）などには、日露戦後の日米関係不安定化の要素となつていた「黄禍論」の萌芽要因を冷静

に見つめる目があった。朝河いわく、

「日露戦役の当時より余は……ひそかに将来を想いて危懼するところありき。すなわち日本に対して篤き同情を有せる人士の中にすらも、一種の黄禍論のようやく萌したりしことこれなり。しかれどもそれは政治的黄禍論にあらずして、主として経済的黄禍論なりき。勝戦の結果、日本が東洋を服して西洋を嚇さんとの説にあらずして、清韓の商工業を支配して他国民が二国における経済上の機会を奪うべしとの説にありき。」⁽¹⁶⁾

朝河がいうところの日露戦後におけるアメリカの「黄禍論」の萌芽要因は、そもそも水野の指摘するような「東力西漸を憂懼」したからでも、また「我が国勢の隆昌を憂ふる」からでもなかった。それはむしろ「清韓」での日本による商業上の排外姿勢への不信感であった。⁽¹⁷⁾「黄禍論」が高揚するアメリカの「挑戦的態度」のみに目を奪われ、その萌芽要因である商業上の排他的振る舞いという日本自身の抱えた問題性に思いを致し得なかった水野には、日本を対象化して眺める視点が欠落していたといわざるを得ない。こうした相対的視点の欠如は、水野をして「自国本位」の思考スタイルへと行き着かせることになり、つまるところ相互理解への道を阻み、他国との戦争の可能性をも否定し得ない立場に至らしめることになっていく。のちに水野は「自伝」において、「日本は被圧迫国であるとの見地に於て、国家解放の手段として軍国主義をさえ信じしたのである」⁽¹⁸⁾とこの時期のことを回想している。事実、「国際公法」を犯しても「何等世界的制裁を加ふるの機関がない」⁽¹⁹⁾国際社会では、「己の受くる損害は己之を防がざる」を得ないとして、水野は軍備の必要性を強調し、「軍備充実論を謳っていたのである」。

だがしかし、水野は前述のように「戦争」回避の「心情」を抱いていたがゆえに、彼のいう軍備充実は積極的な戦争肯定を意図するものではなかった。すなわち「強兵と称するは、徒に勇を恃んで、戦を好むと云ふのではない」⁽²⁰⁾と。では、水野にとって軍備充実の意味とは何であったのか。一つは、すでに宮本盛太郎教授が指摘しているように「軍備抑止」論⁽²¹⁾、「武装平和」論⁽²²⁾・本稿ではこちらの用語を使う）に見出される。確かに水野は、軍備の役割を「戦争を未発に防ぐの効力がある」ものとして捉えていた。つまり「武装平和」は「勢力均衡」論として、「戦争」回避の手立てとして有効なものと見なされたのである。しかしながら、水野自身、戦争発生の可能性を否定し得ないと考えていたとすれば、他方で戦争に備える観点からの軍備というものも念頭に置かざるを得なかったであろう。まさに、日露戦争前の日本の戦争準備がそうであったようにである。水野にとって、戦争を想定した場合、当然のことながら「戦勝」は不可欠であった。そのことはまた、逆にいえば「敗戦」になつてはならないという危機意識の表れにもなつていった。こうした意識は、『此一戦』において、日本海海戦の「戦捷」を総括した記述にも如実に示されていた。水野は「我が国民は此の戦捷に対し、果して如何なる注意を払つて居」たのかと、「提灯行列や祝勝会」にかまけていた国民に問いかける。そして、「戦捷の難有さを知らんが為めには、先づ敗戦の苦痛を究めねばならぬ」として、海戦が「敗戦」となつていた場合の想像図を提示するのである。そこで描かれていたのは、軍事・通商・財政・外交の各面にわたる日本の惨状であった。⁽²³⁾かくて、水野は「敗戦」になつていた場合をこう結論づける。「敗戦に基づく四囲の状況は、斯の如く悲惨なるものである」。

此の時に当り我が国民の採るべき道は如何であらう？。全国を焦土と化し、国民最後の血の一滴までも奮闘するか、否れば露国の命ずる所惟れ従ひ、降伏に等しき和を乞ふの外はあるまい。⁽²⁴⁾ 水野の心に、こつした想像の産物である「敗戦の悲惨さ」の認識が焼きつけられたことよって、まさに「敗戦」だけは避けねばならぬという、いわば「敗戦」回避論が導き出されることとなった。そして、この「敗戦」回避論は、戦争発生を想定したものであるがゆえに、「武装平和」論の枠を超えて、あくなき「軍備補充」へとひた走る可能性をも秘めたものであった。なお、このような「最悪のシナリオ」を想定しながら自らの考えを打ち出す水野の発想スタイルは、爾後においても貫かれていくことになる。

日露戦争を振り返って水野は、これまで見てきたように、一方で軍人に生命の犠牲と哀しい境遇を強いる「戦争の悲惨さ」を、他方で戦争に負けた場合を想像しての「敗戦の悲惨さ」を学習することになった。前者は「戦争」回避論、後者は「敗戦」回避論にたどり着く契機をもつものであった。水野は、ともに軍備充実を前提とするこれら二つの回避論を併せもちながら、その時どきの状況に適應すると考えた方の回避論を高唱することになる。以後、「戦争」回避を企図する「武装平和」論と「敗戦」回避を志向する際限なき「軍備拡張」論との狭間に立ちながら、水野は軍備のあり方をめぐる議論を展開していくのである。

二 「戦争」回避のための「武装平和」論の追求

一九一〇（明治四三）年に『一戦』を執筆（翌年刊行）した海軍少佐の水野は、それまでの五年にわたる陸上勤務を経て、同年九

月舞鶴水雷団所属の第一六艇隊司令に任ぜられ海上勤務に戻った。しかし在勤一〇ヶ月にして、部下にあたるある艦長の処罰をめぐって水雷団長と「正面衝突」し、佐世保海軍工廠副官兼検査官へと異動を命ぜられることになってしまった。だが、そこでも工廠長と馬が合わず「敬遠された」ためか、八ヶ月ほどにて海軍省文庫主管に転ずることとなり、一九一二年（明治四五）年二月に東京へ戻ってくることになるのである。⁽²⁵⁾

海軍省文庫での水野は、「古文書としての外あまり価値のある」とも思えない「書物を手当り放題に読」むという主管生活を送っていた。⁽²⁶⁾ 翌一九一三（大正二）年になると、そのような退屈した海軍生活に飽き足らないこともあって、仕事の合間に彼は二冊目の著書をもつることになる。日米戦争を想定したいささか物騒な内容の未発表記事で『次の一戦』と題名がつけられた。ある事情⁽²⁷⁾で発刊が一年ほど遅れたものの、一九一四（大正三）年六月に出版された。水野がこの書物を執筆するに至ったきっかけとしては、「当時米国がその強大を恃んで小弱日本に対する圧迫」⁽²⁸⁾を加えんとしているという海軍軍人としての対米認識が大きく関わっていた。日本に対する圧迫の具体的内容は同書中で次のように記されている。

『ワシントン』政府は太平洋に浜する米領土の保護を名として、海軍の大拡張と巴奈馬運河掘開の緊急を絶叫し、加州議會は人種劣等を口実として、日本学童通学禁止並に日本移民制限の不法議案を決議する等、陰に陽に、我に対して敵意を表するに至った。⁽²⁹⁾

元來感情に駆られやすい性格の水野は、憤りを覚えながらアメリカの「敵意」に満ちた対日行動を見つめていた。このような水野の

対米観は、当時「米国の太平洋進動」や「米国加州における排日運動」をもって「米国を想定敵とすべき理由を発見し得ない」と主張する「小日本主義者」三浦鍔太郎（東洋経済新報社主幹）のような見方とは大きな隔たりをもつものであった。が、ともかくもアメリカ側による威圧的措置を日本への「敵意」と受け取った水野は、日露戦後に醸成された自らの対米不信を一層増幅させずにはおかなかった。こうして「最悪のシナリオ」を想定する習性のある水野の頭のなかで、日米戦争の展開がシミュレートされたのが『次の一戦』であった。

『次の一戦』では、架空の日米海戦に至る経緯と戦闘模様を描きつつ、水野自身の戦争や軍備に対する考えが表明されている。自説を物語の描写に織り込ませながら提示する手法は、前作『此一戦』とも共通するものであった。『次の一戦』において水野は、戦争や軍備についてどのような見解を示したのであることが、

同書においても、水野は「戦争の悲惨さ」を強調し、「戦争」回避を希求する姿勢を明らかにする。「著者は嘗て軍陣に臨みて、親しく戦争の惨状を目撃し、又屢々戦史を繙いて、深く戦争の禍害を認識せるもの。其の衷心平和を望むの情や、決して人後に落ちざるを期す」と。ここで水野が望む「平和」とは、前節でも見たように、そもそも軍備充実論を前提とする限り、「武装平和」論と結びつかざるを得ないものであった。

ところが、一九〇七（明治四〇）年に策定された「帝国国防方針」⁽³²⁾において、ロシア、アメリカなどが仮想敵国とされたような国際環境を踏まえた時、日本にとって「武装平和」が有効に機能するのかどうか、水野自身、懐疑的になっていたことは否定し得ない。

「人常に言ふ、軍備は平和の保証なりと。若し果して然りとすれば、既に軍備に依つて保証せられたる平和は、必ずや軍備の荒廃に依つて破れ、軍備の欠陥に依つて危うからざるを得ず。……帝国現在の軍備は果して克く、帝国の平和を安全に保証するに足るものなるや。」⁽³³⁾

「小弱」なる日本の軍備で「強大」なロシア、アメリカなどに対抗し、「帝国の平和を安全に保証」できるのか。こうした疑念を抱きつつ、『次の一戦』において水野は、「東亜」における「我が帝国」の「四面楚歌」状況を描いた上で、日本のとり得る選択肢を次のように提起するのである。

「此時に方り我が帝国の採るべき策如何？。陸には陸軍を増勢して北方露国に当り、海には海軍を拡張して東方米國に備んか素より之に越したことはない。併し、斯の如きは是れ到底我が財力の許さざる処である。然らば今日吾人の採るべき策更に如何？。独り陸軍を増勢し、以て海に守りて陸に進まんか、將た独り海軍を拡張し、以て陸に防いで海に出でんか、將た又、屑よく海陸の軍備を撤廃し、父祖六十年の辛苦を水に流して、元々東亜の木阿弥と為るか。三者其の一を出でないのである。」⁽³⁴⁾

ここでは「軍備の欠陥」状態にある日本の選択は、「財力」不足を考慮すれば、陸軍増強か海軍拡張か、あるいは軍備撤廃のうちの一つしかないとしてされている。軍備充実論に立つ当時の水野にとって、軍備の撤廃はあり得なかった。そして、海軍軍人水野の手になる『次の一戦』がアメリカ力を仮想敵国としたものである以上、陸軍増強よりも海軍拡張が優先されることが結論づけられていた。もとよりこの時点で水野がいう海軍「拡張」は、あくまで「小弱」なる「帝

国の平和を安全に保証する」ことを意図したものであり、「戦争」回避を企図する「武装平和」論の枠内のものであった。ただししかし、戦争発生の可能性を否定しない水野にしてみれば、海軍「拡張」が「最悪のシナリオ」への「備え」に転化することも視野に入れていたであろうことは想像し得る。したがって、戦争が不可避と予想される事態となれば、際限なき海軍「拡張」へと突き進んでいくことも潜在的にはあり得ることではあった。水野はいう、「戦争を開始したる以上は必ず敵を屈伏して我が主義主張を貫徹せねばなりません。而して敵を屈伏する為めには我に雄大なる武力を備ふるを必要とするは自明の理であります。」⁽³⁵⁾「このようなくなく、軍備拡張」論の芽をはらんではいたものの、『次の一戦』ではアメリカの対日「敵意」を排撃しながらも、「武装平和」を意図した形での海軍拡張が唱えられていたのである。

こうした海軍拡張論に関しては、アメリカ敵視を否定する前出の三浦などは、「米国を仮想の敵に見立て、而して米国艦隊の威力より我が艦隊の威力が劣弱であるから、拡張せねばならぬ」と強弁する海軍拡張論者を、「徒らに拡張の必要を急呼するのみで、その理由に至つては、空々漠々、未だかつて有力なる根柢あるものを聞かない」として批判していた。⁽³⁶⁾だが、かかる批判対象者の範疇にあつたであろう水野は、この三浦の批判に対する回答を提示するようなことはなかつた。アメリカの「敵意」に憤慨する水野にとって、仮想敵国としてのアメリカの存在自体が「既成事実」であり、海軍拡張の根柢を明らかにすることよりも、アメリカとの間における「武装平和」を可能ならしめる「実力」を構築することそのものが重要だったのである。そこには「実力」への絶対の信仰があつた。いわく、「マイ

ト、イス、ライト!⁽³⁷⁾しかも、軍備の欠陥を克服する上での日本の「財力」不足を痛感する水野にあつては、その「実力」とは軍備のみならず、それを支える「富」をも包含する「国力」を意味するのであつた。「軍備は実に国家の存立に要する脊梁骨にして、富は国乗の活動に資する血液である。」⁽³⁸⁾「それゆえ、我国も亦、一意専心、産業を盛んにし、国力を強くし、以て将来の大成を期すべきである」と。

このように、アメリカとの「戦争」を回避するための「武装平和」を可能とすべく、水野は海軍拡張と産業隆盛を通した「国力」の増進をひたすら訴えていたのである。

三 「武装平和」論の破綻と「敗戦」回避論への傾斜

『次の一戦』は帝国艦隊全滅という悲劇的結末をもつて終わり、最後に「帝国国民は戦を防ぐ準備に於て米国民に負けた!!」という一将卒の「断末魔」の言葉で結ばれる。⁽⁴⁰⁾このことは、この物語の底流に「武装平和」論に基づく「戦争」回避への作者水野の思いが据えられていたことを端的に示すものである。ところが同書発刊まもない七月二八日、オーストリアによるセルビアへの宣戦布告をきっかけとして第一次世界大戦（一九一四—一八）が勃発し、これにより水野が追求した「武装平和」論は覆されていくことになつてしまつた。のちに「自伝」において水野は、「武装平和」論を次のように批判するに至る。

『軍備は平和の保障なり』とは武装平和論者の唱うる唯一のお題目である。欧州戦争前世界の帝国主義的政治家や軍人等は侵略の野心をこのお題目に依つてカモフラージュし、国力を傾けて軍備の競争的拡張に努めた。しかもその結果や如何？ 空前

の盛と大とを極めた欧州の軍備は平和を保障せずして戦争を誘発した。即ち軍備の対立は平和の保障にあらざりて戦争の誘発であることが雄弁に実証されたのである。⁽⁴¹⁾

この文章は、後年「平和主義者」となつてから書かれたということもあつてか、「武装平和論者」を「侵略の野心」を抱いていたものとして、やや結果論的に断罪している点に留意する必要がある。だが、大戦勃発によつて「武装平和」論が「戦争」回避の手段としての有効性を喪失してしまつたとする水野自身の認識を明らかにしてはいていよう。こうして「軍備の対立」が戦争を招いたという厳然たる「事実」によつて、「武装平和」論の破綻を水野は受け入れることを余儀なくされた。そして、その破綻原因を「戦争に依つて受ける利益が被る損害よりも大であると思えば、いつでも戦争を開始する」という「野心国」の「功利的打算」⁽⁴²⁾に見て取ることで、水野は「此世に戦争は絶へない」ことを強く認めざるを得なくなるのである。大戦が勃発し、日本自身も対独参戦（八月三日宣戦布告）する。この「事実」を前にした水野にとつては、「戦争」回避はもはや「理想」論となり、戦争が「現実」のものとして是認せざるを得ないものとなつていった。「苟くも、国家の存立を害し、発展を妨げんとする敵に対しては、正当防衛として、戦争、尚ほ且つ、辞すべきにあらざらざらむ」と。⁽⁴³⁾

この水野の戦争認識は、「正当防衛」という名の下に、「敵」に対する自己の「正当」性を絶対視する点において、『此一戦』執筆時にも見られた「自国本位」の思考スタイルを改めて浮き彫りにさせたものといえよう。「自国本位」の視点に立つ帝国軍人水野にとつての戦争は、「敵国並に敵国民の利害など顧慮する暇はない」⁽⁴⁴⁾、いわゆる

「優勝劣敗」「弱肉強食」の世界観に支配されたものだったのである。こうした世界観に貫かれた水野からすれば、「国家の存立」のためにも、日本の「敗戦」はあつてはならないことであつた。水野のなかに伏在していた「敗戦」回避論がここに顕在化してくることになる。この「敗戦」回避論が日露戦争における日本海海戦の「敗戦」想像図から痛感された先述の「敗戦の悲惨さ」と相通ずる認識を有していることは容易に察せられよう。水野は「敗戦」についてこういう、「戦争に依つて国家が利得を受くるは、唯、戦勝の時にのみ限ることを忘るべからず」⁽⁴⁵⁾、「若し一たび敗れんか、国は亡び身は斃れ同胞の自由も権利も敵の為に奪はるゝに至るかも知れない」⁽⁴⁷⁾、「戦敗の不幸は、戦はずして屈するよりも、迥に大なり」⁽⁴⁶⁾。

かくて水野は、戦争という「最悪のシナリオ」を想定した形で、「敗戦」回避の手立てとしての際限なき「軍備拡張」を主張していくことになる。「夫れ、戦ふには、武力を要す。戦つて勝つ為めには、更に大なる武力を要す」⁽⁴⁸⁾。しかし「軍備拡張」を行う際の障害は、「次の一戦」において水野自身指摘していたように、日本の「富」の实情であつた。「財力」不足は如何ともしがたつたのである。それゆえ水野は、「軍備拡張」と「富」との間に存在するジレンマを感じざるを得なかつた。水野はいう、「曰く、富国弱兵。曰く、貧国強兵。之を政策的に換言すれば、前者は商工主義にして、後者は軍国主義なり。……商工主義、是なるか。軍国主義、非なるか。民力培養、先きにすべきか。軍備拡張、後にすべきか。吾人は今之を、言議するの自由を有せず」⁽⁵⁰⁾。だが結局のところ、水野が直面したこのジレンマは、「小国の富は、畢竟大国の餌。之を防ぐは、独り軍国主義に在り」⁽⁵¹⁾という論法によつて、「財力」不足の問題が棚上げにされた

ままの形で「合理化」されていく。すなわち、「小国の富」を「大國」から守るものこそが「軍国主義」なのだという論理である。

「ここにおいて、「民力培養」(「民」)に対する「軍国主義」(「國」)の優位が打ち立てられる。このことは「個人」と「國家」の關係のあり方にも反映され、水野をして次のように発言せしめることになった。「苟くも個人の幸福が、國家の力に依つて、保護増進せらるゝ現代に在つては、縱令、少数個人の幸福を犠牲とするも、國家の勢力を保持伸張するに力めざるべからず。」⁽⁵³⁾こうして、「敗戦」回避を志向する水野の「軍国主義」は、「國家」のために「個人の幸福」を「犠牲」とするもやむなしとする、いわば國家至上主義的な発想と軌を一にするものとなった。この「犠牲」こそは、戦時にあつては悲哀に満ちた「個人」の「死」を意味することにほかならない。日露戦争以来抱きつづけた「戦争の悲惨さ」への水野の思いは、「戦争」回避の「理想」論化とともに、彼自身の心の奥底に封印されてしまつたことになつたのである。

ところで、このように「軍国主義」を鼓吹していた水野は、大戦開始二年後の一九一六(大正五)年、大戦真っ只中のヨーロッパ(英・仏・伊)およびアメリカへの旅行を思い立つことになる。その目的は「軍事研究並びに視察」ということで、海軍当局から二年の私費留学の許可をとり、「此一戦」の印税と知人の援助をもとに七月ロンドンに向け横浜港を出航した。⁽⁵⁴⁾九月末にロンドンに着いた水野は「飛脚見物」としゃれ込み、現地での見聞を広めていった。そのさなか、水野はドイツ軍によるロンドン空襲(一九一五年一月から開始)に遭遇し、住民の死傷者が目撃されるような「光景凄惨を極む」市中で、「飛行機の来る五分早きか、僕の行く五分遅かりせば」

命を落としていたかもしれぬといった恐怖体験を味わうことになつた。⁽⁵⁵⁾

その後、一九一七(大正六)年二月、水野はロンドンを発つてパリを訪問。北フランスでの三年にわたる敵味方七百万の大軍による「竜闘虎撃の大激戦」の惨状に思いを寄せつつ、約一ヶ月のパリ滞在を楽しみ、イタリア各地を経て四月に再びロンドンに戻るといふ「駆足旅行」を行った。依然として戦闘はつづき、アメリカの参戦によつて「戦争の規模は益々激化」する情勢にあつた。戦争終結の見通しが立たないなか、物価騰貴の影響もあつて水野の旅行「予算は大いなる狂い」を生じ、予定を一年切り上げての帰國を決意せざるを得なくなつてしまつた。ドイツ潜水艦の攻撃におびえつつ、ニューヨークに向けて六月にロンドンを出航。無事ニューヨークに到着後、その「偉大と繁栄」に驚嘆しながら、諸都市を経てサンフランシスコに至り、ハワイ経由にて八月横浜に着いた。船上、横浜港を眺めての感慨は、そのあまりの「貧弱」さゆえの「小日本」へのため息であり、「大アメリカ」との落差への嘆きであつた。⁽⁵⁶⁾

後年、水野はこの時の欧米視察について次のように述べている。「最初の外遊は戦争第三年目と第四年目とで、正に激戦の最絶頂であつた。英仏伊等を巡遊して、現代文明國の戦争なるものが如何に大規模であり、之に比すると日露戦争の如きは子供の軍ごつこに毛の生えた位に過ぎず、日本の如き經濟要素に貧弱なる國は到底今日の戦争に堪へ得るところにあらざることを感じた時、僕は愛國の見地より戦争を否認せざるを得なかつた。」⁽⁵⁶⁾もつとも、ここで水野は日本の「經濟要素」の貧弱さをもつて、自ら「戦争否認」に言及しているが、すでに関教授が論証している

ように、この最初の欧米視察から帰国した水野は実際には「戦争を否認」するようなことはなかった。⁽⁵⁷⁾ その根拠については関教授の研究で詳論されているので、したがって蛇足のきらいはあるが、以下、帰国後の水野が依然として戦争を前提とした「敗戦」回避論の立場に立っていたことのみを若干触れておきたい。

この最初の欧米視察において、水野にとつての最も忘れがたい思い出の一つとなつたものは、先に触れたロンドン空襲での恐怖体験であつたらう。空襲の際に住民の死傷者を目撃したことにより、水野の脳裏に改めて「戦争の悲惨さ」への思いが蘇つたであろうことは十分に想像し得る。その衝撃の大きさもあつてか、帰国後水野は、日本が空襲にあつた場合を想像して次のような文を書いている。

「若し日本の如き繊弱なる木造家屋ならんには、一発の爆弾に三軒五軒粉となりて飛散せん。加ふるに我が国には難を避くべき地下室なく、地下線なく、従つて人命の損害莫大ならんのみならず、火災頻発、数回の襲撃に依つて、東京全市灰燼に帰するやも図られず。」⁽⁵⁸⁾

この文章は「最悪のシナリオ」を想定する習性をもつた水野ならではのものである。このような惨憺たる空襲の想像図は、軍人のみならず一般住民をも含めた甚大な人的・物的被害がもたらされることへの彼自身の危機意識を反映させたものであつた。水野の胸中に「戦争」回避論への回帰願望が生じたとしても不思議ではない。しかし、帰国後すぐに掲載された雑誌論文で自ら述べているように、「世界孰れの国か」として軍国主義ならざるはなし。……軍備の最終目的は戦争に在り。既に自己防衛の為に軍備を設け、又戦争の為に軍備を設⁽⁵⁹⁾けているのが世界の現実だという認識がある以上、

軍備拡張論者の水野が実際に「戦争」回避論へ戻ることは困難であつた。もし「戦争」回避論に戻り得るとすれば、水野自身、「軍備にして撤廃せられざる限り、軍国主義は滅びず」といつていること、「軍備撤廃」を実現するしかなかった。むろん、それは軍備の設置を自明とする世界の現状を意識する水野にとつて、現実には不可能なことであつた。

では、戦争発生が想定されるとすれば、日本への空襲を行い得る国アメリカにどう備え、「敗戦」を回避するべきか。水野は「優勢なる海軍力」と「強鋭なる空中軍」の構築を提言する。⁽⁶⁰⁾ だが、それらを実現するための日本の「財力」は欠乏していた。そのことが「軍備拡張」と「富」との間の前述のジレンマを作り出し、かつ「敗戦」回避の桎梏ともなつていた。最初の欧米視察からの帰国の船上、日米間の「富」の落差を痛感しつつ、嘆息まじりに眺めた横浜港の「貧弱」なありさまが、ジレンマに陥つた水野の眼前に、その後も一つの「原風景」となつて大きく横たわりつづけていくのである。

むすびに代えて 再び「戦争」回避論へ

第一次大戦は一九一八（大正七）年一月のドイツ降伏をもって休戦となつた。屈強なる軍事国家ドイツの敗北は、「軍国主義者」水野に再度の欧州視察へと旅立たせる動因となつた。水野が目撃した欧州戦場の爪あととは、惨烈極まりない情景を呈していた。しかし水野にとつて、その戦場跡の惨状に劣らざる衝撃だつたのは、ドイツをはじめとする敗戦諸国の国民のみならず、戦勝諸国の国民もまた惨憺たる生活状況を強いられていたことだつた。水野いわく、「敗けたドイツ側の苦惨は言つてもなく、勝つた連合国に於てさえも凱

旋の彼等待つものは失業と貧困と飢餓との外に何があつたであろう。まさにこの実地の見聞によって、総力戦としての「現代戦争」が戦勝国にも大きな「苦惨」を与えることを水野は学んだのである。つまり、「敗戦」だけでなく、「戦勝」すらも「悲惨」な結末を招くのだということ。この認識の変化こそが、水野に「思想の大転換」をもたらす大きな契機となつたといえよう。日本の「富」の「貧弱」さゆえに「軍備拡張」実現へのジレンマを感じていた水野は、ここに至つて「敗戦」回避論を背景に退かせ、改めて「戦争」を回避する道を模索していくことになるのである。以後、水野は新たな「戦争」回避論をどのような形で展開させていくのであろうか。これについては別の機会に検討してみたい。

注

- (1) 水野広徳「後篇 剣を解くまで」、『反骨の軍人・水野広徳』経済往来社一九七八年）四一―頁。なお水野の「自伝」は、同上書において「前篇 剣を吊るまで」とセットで構成されている。「自伝」の執筆時期については、太田雅夫教授によつて、その大部分が一九三九（昭和一四）年六月過ぎから一九四一（昭和一六）年頃にかけて書かれたものと推定されている（太田雅夫「水野広徳の秘められた自伝」『桃山学院大学短期大学紀要』第六号、一九九九年三月、四一―四五頁）。
- (2) 同書には、一九三二年の日米戦争論の側面「水野広徳の場合」も収録されている。宮本教授の水野研究には、他に「水野広徳研究余滴」、『京都大学教養部政法論集』第一〇号、一九九〇年一〇月）、「解説・平和主義者になるまで」〔栗屋憲太郎・前坂俊之・大内信也編集』水野広徳著作集』第二巻、雄山閣、一九九五年）がある。

- (3) この論文は、「水野広徳の対米八割論・続編」、『史』第八一号・第八三号、一九九三年八月・二月）とともに、関静雄「大正外交 人物に見る外交戦略論」〔ミネルヴァ書房、二〇〇一年）に再録されている。
- (4) 水野の評伝的研究としては、松下芳男「水野広徳 日米非戦論を中心として」〔四州社、一九五〇年）がある。なお、同書は前坂俊之編『海軍大佐の反戦 水野広徳』〔雄山閣、一九九三年）に復刊・収録されている。
- (5) 松下、同右書、一四―一五頁。
- (6) 水野広徳「著者の言葉」、『現代日本文学全集 第四九篇 戦争文学集』改訂社、一九二九年）四六二頁および水野「前掲「後篇 剣を解くまで」二九九頁。
- (7) 「年譜」〔前掲』現代日本文学全集 第四九篇 戦争文学集』四六五頁。
- (8) 水野広徳「此一戦」〔博文館、一九二一年）の「自序」一―二頁。
- (9) 日露戦争の直接の要因を作つたのは日本なのかロシアなのか、といった問題を考察した論者として、稲葉千晴「暴かれた開戦の真実…日露戦争」ユークラシア・ブックレット³⁹〔東洋書店、二〇〇二年）がある。
- (10) 水野「前掲」此一戦』一頁。
- (11) 同右書、二六六頁。
- (12) 同右書、一四八頁。
- (13) 同右。
- (14) 同右書、三三二頁。
- (15) 同右書、三三八―三三九頁。
- (16) 朝河貫一『日本の禍機』〔講談社学術文庫、一九八七年）一五一―一五二頁（初刊は実業之日本社、一九〇九年）。もっとも、朝河も日露「戦後わずかに三年の今日、米国における日本黄禍論はすでに一部の人士より拡がり、ほとんど国内の上下に普及し、これに加えてその説、単に経済的のみならず、著しく政治的見解を含むに至りたり」として、黄禍論の「普及」とともに、アメリカでも政治的な対日警戒が高まってきたことは認めるところであつた（同上書、一五二頁）。

- (17) ちなみに、橋川文三は「日露戦争以後、日本の動向に対する警戒心が欧米に高まったこと、とくにそれは、日本の滿蒙経営の性格と、日本人移民の増大とに対する疑惑から、アメリカの太平洋岸においてヒステリックにまでひろがったことは事実であった」と述べ、対日警戒の要因として日本人移民の問題も存在していたことを指摘している（橋川文三『黃禍物語』岩波現代文庫、二〇〇〇年、八五頁・初刊は筑摩書房、一九七六年）。
- (18) 水野、前掲「後篇 剣を解くまで」三〇〇頁。
- (19) 水野、前掲『此一戦』五一―五三頁。
- (20) 同右書、三三三頁。
- (21) 宮本、前掲「水野広徳における思想の転回」（宮本・関・小西・坂口、前掲書）八頁。
- (22) 水野、前掲『此一戦』三三三頁。
- (23) 同右書、三三三―三三六頁。水野によれば、各面の惨状は以下のとおり。
 軍事面 「当時滿韓の野に在りし百万に近き我が軍隊は、後方輸送の途全く絶えて、食ふに糧食なく、戦ふに彈藥なく、進んでは敵を敗る能はず、退いては本国に還るを得ず、……加之我が沿岸は至る処敵襲を被りて、住民其の堵に安ずる能はず、海上交通は全く杜絶して、諸島嶼は敵の占領に任せねばならぬ」
 通商面 「海外貿易は全然破壊せられ、煤煙の跡近海に絶えて、埠頭汽笛の声を断ち、商売は資産を破りて、工場は雀羅を張り、久しきに亘れば国民漸く飢に迫る」
 財政面 「若し敗戦の悲運に接せんか、我が財政の信用地を払つて、国家的破産するの外はあるまい」
 外交面 「英国の如き我が同盟国は暫く措き、其の他の列国は尚ほ依然として我に同情を寄せるであらうか。……殊に事大思想の強き清韓兩國の如きは、尚ほ我に好意を表したであらうか」
- (24) 同右書、三三六頁。
- (25) 水野、前掲「後篇 剣を解くまで」三〇一―三〇三頁。
- (26) 同右書、三〇四頁。
- (27) この書物の出版をめぐる顛末は以下のとおり。水野によれば、「僕は上官の検閲だとか、出版願だとかの手続が面倒なのと、前の『此一戦』に対する内職稼ぎなどと陸口がうるさいのとで、一年あまりも筐底に投げ込んで居た。然るにたまたま友人の窮迫を救う為、必要に迫つたので、僕はこの書を一海軍中佐（この時僕は中佐になって居た）の匿名を以て出版した。」ところが、その後匿名が発覚し、「無断で図書出版の廉に依り謹慎五日に処すとの懲罰」となった。「書物は再出版を許されたが、こんな紛糾の為に却つて世間の注意を引いたと見え、製本が間に合はんほど売れたということである。然るにその後間もなく欧州戦争が突発して日本も参戦することとなり、対米関係上その筋の希望もあり、傍ら種々の理由により再版後二月ばかりで絶版としてしまった」という（同右書、三〇四―三〇六頁）。
- (28) 同右書、三〇四頁。
- (29) 一海軍中佐（水野広徳）『次の一戦』（金尾文淵堂、一九一四年）一九頁。
- (30) 三浦鏐太郎「海軍拡張の理由如何」、『東洋経済新報』一九一三年七月五日号、「論説」（松尾尊允編集・解説『三浦鏐太郎論説集 大日本主義か小日本主義か』東洋経済新報社、一九九五年）一七八―一八〇頁。三浦によれば、「米国の太平洋進動」については、「列強が海外領土の獲得に競進したことは、十九世紀以来の一大特徴」であり、列強諸国の「太平洋進動」も「何ら米國と異なるところは無い」とし、また「米國加州における排日運動」については日米「兩國の親交に多少の暗翳を投じているが、この問題に関しては、吾輩は切に両國民の聡明に依頼するもので、また必ず戦争以外の方法で解決し得ることを信ずる」というものであった。その上で三浦は、「果してしからは、我が國がフィリピンを奪い、ハワイを併呑する進撃的態度をとれば格別、しからざる限り、日米間には、どこを見ても、利害の根本的衝突の事實はない」と述べている（同上）。
- (31) 一海軍中佐（水野）、前掲書の「序」四頁。
- (32) 「帝國国防方針」についての近年の研究としては、黒野耐『帝國国防方針

の研究」（総和社、二〇〇〇年）などがある。

- (33) 一海軍中佐（水野）、前掲書の「序」三 四頁。
 (34) 同右書、二四 二五頁。
 (35) 同右書、七八頁。
 (36) 三浦、前掲、一七六 一七七頁。
 (37) 一海軍中佐（水野）、前掲書、一〇頁。
 (38) 同右書、三六 三七頁。
 (39) 同右書、四〇頁。
 (40) 同右書、二六〇頁。
 (41) 水野、前掲「後篇 剣を解くまで」四一七頁。
 (42) 同右。
 (43) 水野広徳「戦争我観」、『中央公論』一九一四年一〇月号）七六頁。
 (44) 水野広徳「欧洲大戦観 剣光銃影」、『日本及日本人』一九一五年四月号）五一四頁。
 (45) 水野、前掲「戦争我観」八一頁。
 (46) 水野、前掲「欧洲大戦観 剣光銃影」五二頁。
 (47) 水野、前掲「戦争我観」八一頁。
 (48) 水野、前掲「欧洲大戦観 剣光銃影」五一四頁。
 (49) 同右。
 (50) 同右、五一七頁。
 (51) 同右、五一六頁。
 (52) 同右、五二頁。
 (53) 水野、前掲「後篇 剣を解くまで」三〇七頁。
 (54) 無名氏（水野広徳）、「バタの臭 卅二」、『東京朝日新聞』一九一七年一月一日。
 (55) 水野、前掲「後篇 剣を解くまで」三三六 三五〇頁。
 (56) 水野、前掲「著者の言葉」四六一頁。
 (57) 関、前掲「水野広徳と第一次世界大戦（一）」六三 六九頁および「同上（二）」五七 七一頁。さらに宮本、前掲「解説・平和主義者になるまで」三五四 三五五頁でも、この時点での水野の「戦争否認」に疑問が投げかけられている。
 (58) 無名氏（水野）、前掲。
 (59) 水野広徳「犬牙蜂針皆是れ自衛の機関」、『中外』一九一七年一〇月号）三三頁。
 (60) 同右、三五頁。
 (61) 無名氏（水野広徳）、「バタの臭 卅三」、『東京朝日新聞』一九一七年一月一日。
 (62) 水野、前掲「後篇 剣を解くまで」四一五頁。

MIZUNO Hironori's Transforming View of Armaments

FUKUSHIMA, Yoshikazu

キーワード：水野広徳、軍備、戦争
Key words : MIZUNO Hironori, armaments, war